



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【4月号】 令和5年4月4日



■掛高には「本物」がある

令和5年度がスタートします。校長として着任した本間達也です。昨年まで本校に3年間教頭として勤務していましたので、掛合分校にも時折お邪魔することがありました。気持ちを新たに精一杯頑張る所存です。どうかよろしくをお願いします。

山間（やまあい）育ちの私は、小さい頃から川で遊ぶのが好きでした。サワガニやスナドジョウを捕まえたり、潜ってヤマメやイワナを探したりと、とにかく川べりで過ごすひと時が楽しみでした。私がイメージする川といえば、真夏でも1時間と浸かっていられない冷たく流れのはやい溪流ですが、支流を集めて流れる大河の雄大さにも惹かれます。

「ほんりゅう（本流）」には、川の大きな流れという意味のほか、正当的・本来的という意味もあります。掛高のランドデザインの中央に配置されたキャッチコピー「掛高には『本物』がある」は掛高の教育内容の両輪をなす「本物の少人数教育」「本物の地域密着」を指しています。『ほんりゅう』には、この掛高のキャッチコピーである「本物のあり方」の意味も込めています。

枝葉末節にとらわれず物事の大局をとらえ正々堂々と意見の言える、また流量豊富な大河のように、器の大きさ・懐の大きさをあわせ持つ人であってほしいという願いも込めて、校長発のおたよりを『ほんりゅう』としました。



三刀屋高等学校掛合分校ランドデザイン

使命 芯ゆめぬかな指導・支援とわかりやすい授業によって学力を育むとともに、地域をフィールドとした探究学習や、多様な人々との交流を通して、自立心を高め、地域や社会へ貢献する意欲をもった人材を育成する

校訓『志操堅固（しそうけんこ）』 自分の考えや志を、強い意志で守って貫くこと

教育目標 (1) ふるさとを愛し人を愛し、志をもって社会に貢献する人材の育成 (2) 自己の可能性に挑み、主体的に道を拓いていく人材の育成

目指す生徒像 《学力》 勉学・勤労に主体的に取り組み、自らの可能性を広げていく生徒
《社会力》 自己管理能力を身につけ、興味・関心をもって社会とかがわっていく生徒
《人間力》 自他の人権を重んじ、誠実な言動で人間関係を築いていく生徒

本物の少人数教育

「学び直し」の掛高

- 50分授業、毎日6時間の固定化された時程
- ICT機器をフル活用したわかりやすい授業
- 生徒が主体的・協働的に学ぶ授業スタイル
- 漢字検定・英語検定を通じた基礎学力の定着
- 家庭科検定・商業科検定を通じた実践力の強化
- 掛高オリジナル「掛高基礎力テスト」の実施
- A1型教材を活用した個別最適な学び

「進路実現」の掛高

- 進路実現のための個人指導を徹底
- 職業体験（インターンシップ）、進路ガイダンス
- 将来、地域・社会で活躍するためのキャリア教育

雲南コミュニティハイスクールコンソーシアム（UCHC）
～多様性と温もりの中から学び合う日本一チャレンジに優しい教育環境～

- 雲南市
- 三刀屋高校、大東高校
- 一般社団法人ine
- 団体、NPO、企業 他

雲南市スペシャルチャレンジジュニアプログラム

求める生徒像 『何事にも志をもって意欲的かつ誠実に取り組むことのできる生徒』
《学力》 義務教育段階における基礎的学力を有する生徒
《社会力》 学級活動・生徒会活動・地域活動に積極的に参加する生徒
《人間力》 人の気持ちを思いやり、良好な人間関係を築ける生徒

本物の地域密着

「地域探究」の掛高

『地域をフィールドとした探究学習』

- 1年「地域探究学習」掛合町内課題解決策提案「探究基礎学習」データ収集・解析など
- 2年「地域貢献学習」雲南ブランド米応援PJ「海外研修旅行」地元産品の海外PR活動
- 3年「地域創造学習」地域活性化策提案「個人課題研究」自由テーマの卒業研究

「交流・発表」の掛高

- 幅広い世代の人たちとの交流を通じた学び
- 保育園・小学校・中学校との交流を通じた学び
- 各種研究発表会でのプレゼンテーション

地域ボランティア活動
小学生への読み語り 他

掛合分校後援会
掛合分校同窓会さながの丘

地域の関係諸機関

- 掛合の子どもを育てる会（保小中高連携）
- 雲南市社会福祉協議会
- 掛合町内自治組織
- 掛合町内交流センター
- 地元企業、営農組合 他

掛合分校学校運営協議会

SINCE 1953



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長 癸 『ほんりゅう』

【4月号②】令和5年4月10日



■令和5年度を迎えて—始業式にて—

*一部入学式式辞と重複する部分があることをご了解ください。

令和5年度がスタートします。三刀屋高校掛合分校（通称カケコー）は昭和28年、1953年に創立され、今年で70周年を迎えます。人で例えるならば古希（こき）というお祝いの歳となります。皆さんとこれまでのカケコーの歴史を見つめ直し、新たなステージに向かえる一年にしたいと考えています。

そんな今年度のスタートにあたり合言葉をつくりました。「**向き合う。その先に…**」です。「**向き合う**」と聞いて皆さんが頭に浮かぶものは何でしょうか？人？もの？それとも悩みや課題？

「**向き合う**」の意味を辞書で調べてみると「互いに正面を向いて対する」とあります。ことばのニュアンスとしては、あまり見たくないものを見るという感じですかね。つまり「**向き合う**」ためには一定の“覚悟”や“つよさ”が必要といえるということでしょう。からだの“つよさ”ではなくこころの“つよさ”ということです。

私は本校で3年間を過ごしました。ただ本校に勤めるまであまり高校時代の自分に「**向き合う**」ことはしてきませんでした。それは、高校時代の弱い自分に「**向き合う**」ことが怖かったんだと思います。「**向き合う**」には、一定の“覚悟”や“つよさ”が必要なんですよね。つまり自分はどうしても“よわい”人間だったと。皆さんはどうか？新年度のこの機会に自分自身に少し「**向き合っ**て」みませんか。「**その先に**」は、きっと新しい世界、可能性が開けていると思います。

でも、正面から「**向き合う**」と疲れるよね。たたら製鉄を見学した際に、日本刀をつくる刀匠の方が言っていました。何でも切れるような“かたさ”ばかり追い求めるとポキッと折れやすくなってしまふ。だから“かたさ”とともに“柔らかさ”も必要ですと。相反するようですが、何事においても、時には柔軟に考えたり、かわしたりする“しなやかさ”も必要ということです。皆さんを応援してくれる誰かは、必ずいます。“よわい”自分をみせることができるのも一つの“つよさ”ですよ。

2年生はあと2年間、3年生は残り1年、具体的な夢の実現に、時間は限られています。しかし、皆さんの可能性は無限大です。皆さんが「**その先に…**」進んでいけるよう、私たち教職員は、努力を惜しみません。

明日の入学式では、新たに24名の仲間が加わります。彼らが不安なく高校生活をスタートできるよう、先輩として温かく導いてあげてください。

生徒69名と、我々教職員、そして保護者・地域が「チームカケコー」となって、これから一年間「チームカケコー」でがんばりましょう。



■トータルで考える

買ったばかりのノートの1ページ目に書き始めたものの、うまく書けなくて失敗したなと思って、新しいページにもう一度最初から書き直す。ゲームを始めたものの、うまくいかなかったからリセットして再度始める。皆さんには、そんな経験はないでしょうか？「今回はこのまま終わらせて次に備えよう」と考えたり、最初につまづくと一気にやる気が失せてしまい、あきらめの境地に入ってしまったたり。そういう気持ちになったことはありませんか？

部活動等の大会応援をしていると、時折そんな場面に出会うことがあります。文化系の部活動で…思った音が出なかった時、言うべき台詞を間違えた時、当然“ライブ”ですからテレビドラマの収録のように「テイク2!」「テイク3!」というわけにはいきません。体育系の部活動で…序盤に失点してしまった時、終盤までリードされてしまっている時、プロのリーグ戦とは違い次がないトーナメント戦では「もう逆転するのは無理だから今回は負けゲームとしよう。」というわけにはいきませんよね。

このような場面で必要となる考え方はいくつかあるとは思いますが、私は継続力と修正力をあげたいと思います。

継続力とは、調子のいい時も悪い時も一喜一憂せず平常心を保ちながら“続ける力”です。時間いっぱいまで、ゲームセットまで、練習してきたことを“続ける力”です。忍耐力をもって続けていけば必ずいい流れがやってきます。“続ける力”はきっといい流れを引き寄せます。一方、修正力とは全体を俯瞰（ふかん・広い視野をもって大局的に考える）して、バランスをとりながら形を整えていく力です。以前あるテレビ番組で、数人がチームを組み漢字一文字を一画ずつ書きながら文字を完成させるゲームをしていました。一画目を受け、二画目、三画目を書く人がバランスをとりながら修正していき、最終的に文字の出来栄を競うというものです。なかには、“失敗”と思った一画目が結果的に文字全体に良いアクセントをもたらし、個性的で躍動感あふれる文字になっているものもありました。最初ば“失敗”と思っていた一画目が、トータルで考えると“成功”だったということになります。また、最初にミスをしたとしても尻上がりに調子を上げていくことによって、結果的に相手に対して良い評価を与える場合もあります。大事ななのは「トータルで考える」ことです。最初にミスをして、あきらめずこれまでやってきたことを継続して行う力と、全体のバランスを考えながら丁寧に修正していく力です。

部活動を例にとって話を進めてきましたが、日常生活においても、そして人生においても同じことがいえるのではないのでしょうか。つまづく時もあります。失敗する時もあります。うまくいかない時もあります。しかし、真価が問われるのは、その時どう自分と向き合い、どう考えるかです。時にはいい意味で鈍感に考えたり、遊び心をもったりすることも必要かもしれません。そして、自分を支えてくれる誰かにヘルプを求めることも大切なことです。「困ったときはお互い様」そんな気持ちを大事にしたいものです。

何か始める時、新たにチャレンジしてみる時、継続力と修正力を思い出してみてください。「最後まで…希望を捨てちゃいかん。あきらめたらそこで試合終了だよ。」

そういえば、安西先生*もそう言ってたよね。

*漫画「スラムダンク」に登場する安西光義先生



■私が先生になったとき

生徒の皆さんと他愛もない雑談をしていると「先生ってなんで先生になったんですかあ？」と聞かれることがよくあります。そんな場面での会話は、お互いリラックスして話をするので少し照れくさいと思うことでも話しやすい場合があります。

私が教員になりたいと思ったのは、自分が中・高生の時に悩んでいたことや迷っていたこと、あるいはこうすればよかったなあと過ぎてから感じたことを、人生の先輩として今後“その時”に直面する後輩の皆さんに伝えたいという気持ちがあったからです。ただ、今思うとピーターパンのように大人の世界に飛び込むのが怖くて、学校という子どもの世界にずっといたいという気持ちがあったのかもしれません。

こう答えると、生徒の皆さんからは「アツいですね（笑）」的な反応が返ってきます。雑談の中ですから、それに対して私も「まあね～（笑）」という感じで返します。半分冗談の軽い感じの会話のようにみえますが、それはお互い表面的な照れ隠しにすぎず、案外真面目なやり取りがその奥にはあるものです。このようなシチュエーションだからこそ、リラックスして相手の言葉を受け容れやすいのかもしれません。そして、真剣に伝えると必ず相手の心に響くものです。

親子の関係性もこれと似ているところがあると思います。お互い照れくさくてなかなか正面から会話ができないことってありますよね。当然ですが、大人の誰しもが中・高校生時代を経験してきています。親として構えずに、雑談や日常会話でのちょっとした中に人生の先輩としての経験談を交えていくと、子どもの心に響くと思います。独り言をいう感じで十分です。きっと子どもは受け止めてくれます。子どもにとって、親こそが最も身近な人生の先輩なのです。

教員になってからずっと机の上に置いていた詩があります。教職に就いた初年度に目にした教育雑誌に掲載されていた詩です。その当時は宮沢賢治の作品といわれていました。（その後作者は不詳という説が有力となりました。）心に迷いが生じそうになった時は見るようにしていました。生徒に言う以上は、教員である自分も率先してしなければいけないと自分に言い聞かせていました。この詩の「先生」の部分「親」に置き換えて考えてみてはいかがでしょうか？

本当のことが語れる自分、明日のことが語れる自分、夢が語れる自分、胸を張れと言え自分、仲良くしろと言え自分、ガンバレ、ガンバレと言え自分、勇気を出せと言え自分—そんな自分で私はありたい。いやちょっとアツいですね（笑）

私が先生になったとき

宮沢賢治

私が先生になったとき
自分が真理から目をそむけて
子どもたちに
本当のことが語れるのか

私が先生になったとき
自分が未来から目をそむけて
子どもたちに
明日のことが語れるのか

私が先生になったとき
自分が理想を持たないで
子どもたちに
いったいどんな夢が語れるのか

私が先生になったとき
自分に誇りを持たないで
子どもたちに
胸を張れと言えるのか

私が先生になったとき
自分がスクラムの外にいて
子どもたちに
仲良くしろと言えるのか

私が先生になったとき
ひとり手を汚さず自分の腕を組んで
子どもたちに
ガンバレ、ガンバレと言えるのか

私が先生になったとき
自分の闘いから目をそむけて
子どもたちに
勇気を出せと言えるのか



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長 癸 『ほんりゅう』

【7月号】 令和5年7月3日



■残されたワンピース

本校校長室の棚に3つの硬式野球ボールがあります。

1980年に開催された県春季高校野球選手権大会、山陰選抜大会、中国大会のウィニングボールです。当時エースとして活躍されたAさんから、2014年9月にご寄贈いただいたものです。



中国大会

山陰選抜大会

県春季高校野球選手権大会

今から43年前の1980年。本校野球部は快進撃を続けていました。県春季高校野球選手権大会、山陰選抜大会、中国大会の3大会すべてに優勝し、まさに無双状態でした。そして、1978年以来2度目の甲子園出場は間違いないといわれていました。夏の甲子園予選も1回戦で津和野高校に2-0と快勝し、2回戦で江津工業高校と対戦しました。試合の日は、全学年対象の夏季補習中でしたが、校内放送で試合経過が流されていました。試合は1-2で追いかける展開となりましたが、誰もが逆転勝利を信じて応援していました。しかし、さあこれからという時に降雨のためコールド負けとなり、その瞬間2度目の甲子園出場は幻と消えました。当時高校1年生だった私もその現実を受け止められない気持ちだったことを鮮明に覚えています。

寮生だった私は、その特権？として寮の先輩方を通じて寮生以外の上級生の方々とも入学後早々に関わる機会が多く、野球部の先輩方からも可愛がっていただきました（本当の意味で笑）。Aさんは制球力のあるサウスポーでメンタルも強い方だったと記憶しています。

ご寄贈いただいた当時のメモには、「Aさんは『夏の大会には優勝できなかったものの、この3大会すべてに優勝できたのは、一つ一つの試合を最後まであきらめず粘り強く戦い抜いたことであると今でも心からそう思っています。野球に限らず、勉強に部活動に一步一步あきらめず粘り強く取り組んでほしい。』とこのボールを渡される時、思いを込めて話されたことが印象に残っています。」と綴ってあります。

「夏の大会も当然優勝し、甲子園出場は間違いない」と周囲が勝手に期待する中で試合に臨むことはどれだけプレッシャーがかかるものだったか、そしてどんなに悔しい思いをされたことが今なら容易に想像できます。しかし、当時先輩方にそんな気遣いや思いを抱けなかった自分が申し訳ない気持ちになります。

あれから43年経ちました。その間、夏の大会はベスト4が4回、準優勝1回。掛合分校の先輩方もそのメンバーとして活躍されました。昨年も含め、本当に栄冠はあと一步のところに来ています。いよいよ、今年も夏の大会が始まります。もちろん、甲子園出場を目指して大会に臨んでほしい気持ちはありますが、勝負に“絶対”はありません。しかし、一つ一つの試合を最後まであきらめず粘り強く戦い抜くことで、43年前の先輩が成し遂げられなかった“最後のワンピース”を手にすることができるかと確信しています。

私たちも、勝ち負けという結果以上に、選手の皆さんが最後まであきらめず戦い抜くその一瞬一瞬を精一杯応援したいと思っています。

*本文中では個人名ではなくAさんと表記させていただきました。



■ダチョウの生き方ー1学期終業式にてー

1学期も今日で終わりです。令和5年度も3分の1が終わりましたね。始業式・入学式で皆さんには「向き合う。その先に…」という合言葉を示しました。この1学期、皆さんは、どのくらい自分自身と向き合えましたか？

この図はある国の国章（マーク）です。どこの国かわかりますか？そうオーストラリアです。左側のカンガルーは有名ですね。では、右側の動物はわかりますか？この動物

はダチョウ目のエミューというダチョウよりもやや小柄な鳥です。カンガルーとエミューが抱えている中央の図形はオーストラリアの国土を示していて6つの行政区の紋章が描かれています。この2つの動物が国章に採用された理由は何でしょう？それは、両者とも前進しかできないということからだそうです。後ろを振り返らず、前へ前へと国づくりを進めようとする建国者の意気込みを感じますね。

ダチョウもエミューも鳥の仲間ですが、空を飛ばません。その代わりに鳥の仲間には通常4本ある足の指を2本または3本に進化？させて、とても早く走れるようになりました。ダチョウは約70 km/h、エミューも約50km/hの速さで走ることができます。空を飛ぶことができない、後ろに進むことができないという弱点・ウィークポイントを補って余りあるダチョウやエミューの強み・ストロングポイントといえるかもしれませんね。皆さん、自分も持っている強み・ストロングポイントって何か認識していますか？「夏休みは“弱点克服”」というフレーズはよく聞きますが、あえて強み・ストロングポイントを伸ばしてみる機会にしてみるのもいいのではないのでしょうか？何より、自分の長所について考えるのはポジティブでいい気持ちになれますからね。

ところで、ダチョウは、敵に襲われるなど危険が迫ったときは頭を砂の中に入らずめてじっとする習性があるといわれていました。現代の科学では、ダチョウにそのような習性はないといわれていますが、心理学の世界では「オストリッチ・コンプレックス（ダチョウ症候群）」という用語として語られることがあります。「オストリッチ・コンプレックス（ダチョウ症候群）」とは、目の前にある課題や危険に正面から向き合わず、何もしないでやりすごそうとする心の状態です。危険が迫ったときのダチョウのように、砂の中に頭をうずめることにより安全な場所に隠れたつもりになっている様子に例えたものです。

難しい局面や難題に直面したとき、私たちは意識的・無意識的につい見ないふりをしたり、避けて通りがちになったりします。明日までにやらないといけない課題があるとき「ひとまず今晚は寝て明日起きてからやろう！」と思ったりしますよね。多くの場合は起きませんが…。そうして問題を先延ばしにして、時間だけが過ぎていきます。目の前の状況は変わらないのに、です。このような行動はどこかダチョウの習性（科学的には否定されていますが）に似ていませんか？

ダチョウのもつ強みと弱さ（あくまで心理学用語でのことですが）、自分に置きかえて考えてみませんか？“向き合う”夏に。さあ「君たちはどう生きるか？」



終業式では国名の部分は隠しました



■山のかたち—2学期始業式にて—

8月11日は「山の日」でしたね。皆さんは身近な山といわれたら、どの山を思い浮かべますか？私が身近な山として思い浮かべるのは琴引山（標高1,014m・飯南町）です。琴引山は弥山とも呼ばれる霊験あらたかな山で、出雲国風土記にも記述がみられます。山頂の琴弾山神社は大国主命が琴を弾いたという言い伝えもあり、付近にある洞窟は出雲大社まで繋がっていると聞いたこともあります。もちろん真偽は不詳ですが…。私が思い浮かべる琴引山（図1）は、東西に広くそびえる雄大なイメージです。



図1

5年前に飯南高校に赴任した時、校舎から三角の山が見えました。「あの山は何という山ですか？」と聞くと「琴引山です」という答えが返ってきました。その時は自分が抱いていた琴引山のイメージとはあまりにもかけ離れていて、とても同じ山とは思えませんでした。私がイメージしていた琴引山は北側から見た山体でしたが、

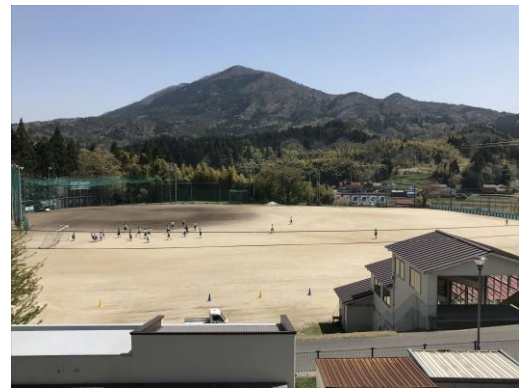


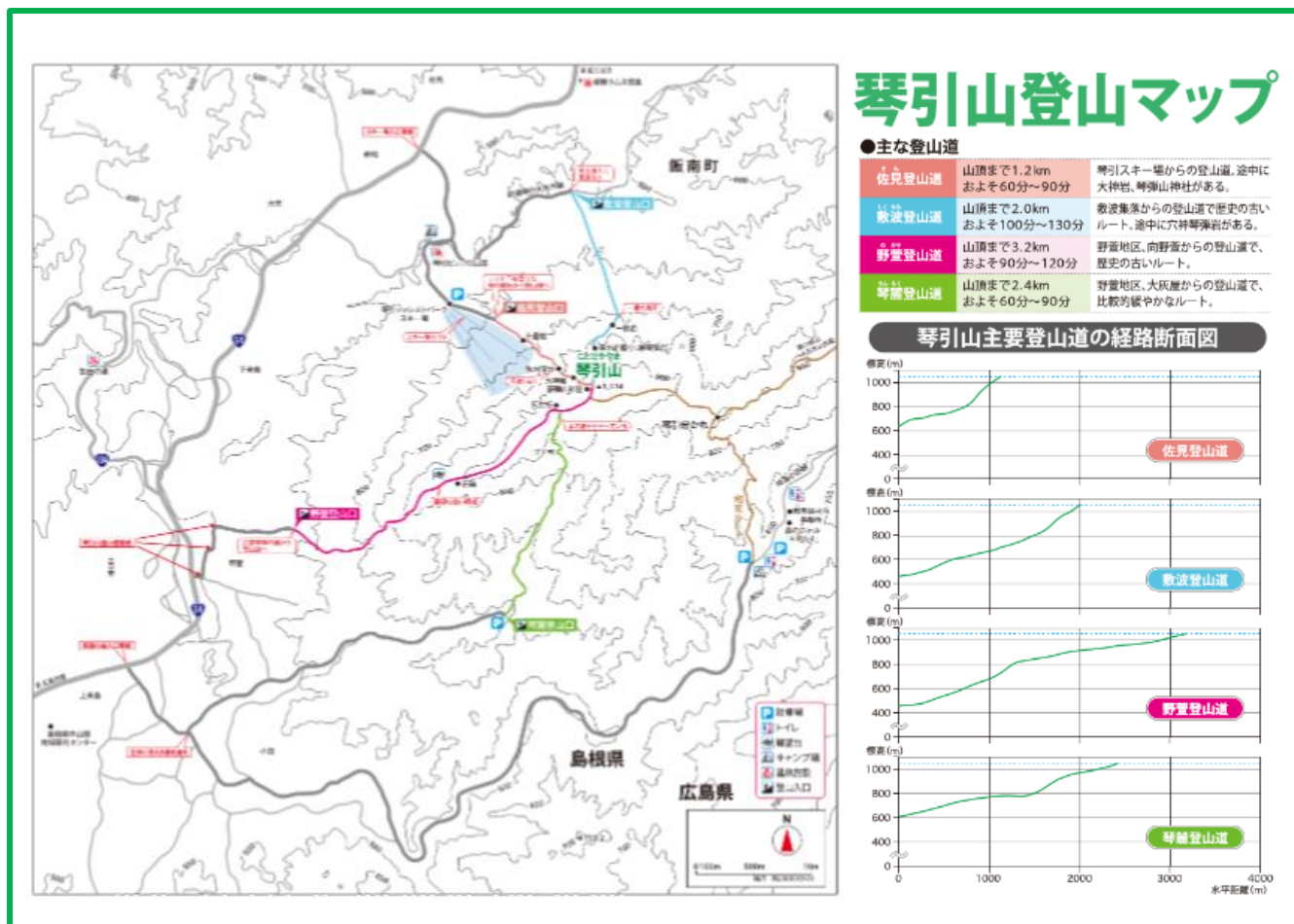
図2

西側から見た山体（図2）は全く違う姿を見せていました。一気に琴引山の印象が変わりました。同じ所から見た山体だけを「琴引山」として認識していた自分の視野の狭さを痛感しました。琴引山としては「一か所ではなくいろんなところから私を見てね」という気持ちだったかも知れません。

小学校の遠足も含め琴引山には数回登ったことがありましたが、改めて登ってみることにしました。登山道は距離や傾斜が異なる4コースがありますが、一番距離が短く傾斜のきつい「佐見登山道」を選択しました。登山中は、上りあり下りあり平坦あり時折階段ありで、ずっと下を見ながら歩きつづける時間帯もありました。空気は爽やかで木々の緑は美しいのですが、目標とする山頂はなかなか見えてきません。1時間ほどしてやっと山頂に到着し眼下にパノラマが開けました。爽快な気分とともに充実感と達成感を感じ、登山道に敷き詰められた落ち葉を見ながら地道に登ってきた苦労が報われた気持ちになりました。山頂では飯南町のマスコットキャラクター「い〜にゃん」も出迎えてくれていました。山頂に来てみないと分からない風景がそこにはありました。

皆さんが目標にしているものは何ですか？どんな目標でも視点を変わると違った風景が見えてくるものです。固定観念にとらわれず、違った角度からとらえ直してみると抱くイメージが変わることもあります。そして、目標へたどり着くためのコースは1つではありません。距離は短くても傾斜がきついコース、距離は長くても傾斜が緩やかなコース。一人一人に適したコ

コースがあるはずです。コースを選ぶ際には、そのコースをたどったことのある人からのアドバイスも有効でしょう。多くの情報を参考にしながら、しっかりとした準備をすることも大切です。目標にたどり着くまでの道のりは平坦ではないかもしれませんが、きれいな景色は見えずらいかも知れません。しかし、地道に歩き続ければ必ず目標にたどり着けます。目標にたどり着いたら一気に視界が開けます。その時の爽快さや充実感、達成感を味わえるのは歩き続けてきた人だけに与えられる特権です。皆さんに今見えている山はどの山ですか？



琴引山山頂の様子。
遠方に三瓶山（標高 1,126m）も見えます。



新緑の琴引山



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【9月号】 令和5年9月20日



■演劇のチカラ① – 記憶のトリガー –

その瞬間、1000人以上が入った会場のあちこちからすすり泣く声が聞こえました。本校演劇部が国立劇場で上演した『ローカル線に乗って』のフィナーレの瞬間です。『ローカル線に乗って』は、本校演劇部が全国高等学校総合文化祭（全国総文祭「2023かごしま総文」）で第2位の成績をおさめ、国立劇場での上演権を獲得した演劇です。

現代を生きる女子高校生令和さんが、JR木次線の車内で平成、昭和を生きた人たちと出会い、会話を通じて戦前から終戦直後の木次線沿線の様子を描き「木次線は今後も地域に必要なのか？」「本当の豊かさとは何か？」と問いかけた内容のものです。全国総文祭では、審査員

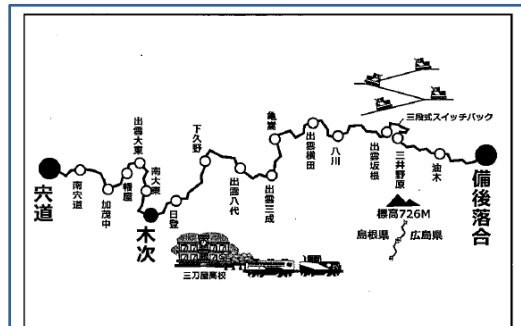
の方から「高校演劇という枠からもうちょっと超えてしまっている」との評価を受け、地元地域の社会問題に向き合いながら高い演技力で訴えかけた姿に称賛の声が上がりました。本校演劇部を密着取材していただいたNHK松江放送局が制作した番組の中では「自分の問題として捉えなおそうということがほかの高校生と比べるとひとつ優れていたんじゃないかと思いました。」

（審査を担当した演劇評論家の西堂行人さん）「(気持ちを)言葉にすると涙が出ちゃいそうで。すごい感動してて。」(都内在住女性)「高校生が実際に起きている自分たちの線路の存続の問題というものを劇にして伝えるということがすごく心に響くものがあったって本当に感動しました。」

（四国から来た男性）といった声が紹介されていました。

全国総文祭出場に先立って7月に雲南市で行われた壮行公演には約500名の皆様にお越しいただきました。公演後、地元在住の卒業生の方（女性・70歳代）からお手紙をいただきました。そこには高校卒業後、木次駅から機関車C56108号に乗って松江市の学校まで通学したこと、冬になると宍道と加茂の間にある金山峠で車両が止まることが多く、その度に乗客が降りて後ろから押したことなど、木次線の思い出とともにこれまでのご自身の人生の一コマ一コマが、丁寧にたたためてありました。

また、国立劇場での公演後は、東京在住の卒業生の方（男性・50歳代）から私あてに次のようなメールをいただきました。「昨日、国立劇場で演劇部の公演を観てきました。同級生では私だけだったようですが、東京在住のOBさん達と連れ立って行きました。あらすじもさることながら、圧巻のパフォーマンスで、生徒さんたちの芝居に心を揺さぶられました。国立劇場、しかも大トリということで、生徒さんたちはプレッシャーだったかもしれませんが、そんなことを感じさせない伸び伸びとした熱演に、しばらく拍手が鳴りやみませんでした。三刀屋高校の演劇部



作品介绍

10時56分発の汽車に乗るために女性が一人、木次駅へ駆け込んでくるが、ホームに車両の姿はない。一人たたく駅員に時刻を尋ねると「1059」と答える。間に合ったのか間に合わなかったのか、二人の不毛なやりとりの中、来るはずのない謎の列車が到着する。おそろおそろ乗り込むと、それは昭和の思い出を乗せた汽車だった。

過去と現在、現在と未来、ローカル線が問いかける豊かさのあり方。

が全国区になった瞬間に立ち会うことができとても嬉しい気持ちで帰路につきました。生徒さんたちは今日、帰郷されるそうですが、どうぞ労ってあげてください。」そして、このような激励とともに「木次線で松江や三井野原に行ったり、大東の雲南病院に行ったり、桜土手が通学路だったり、40年前に故郷から旅立った記憶が重なったり、様々なことが去来する演劇でした。」と思い出を綴っていらっしゃいました。

私自身も、高校を卒業した3月末、都会の大学に旅立つクラスメートを一人また一人と駅で見送った記憶がよみがえってきます。クラスメートは大学に合格して、桜の咲く4月から始まる次のステージに向け意気揚々と旅立っていく。それなのに自分は4月からも志望校に向けての準備をしなくてはならない。笑顔で見送った後の寂しさ…心の中は挫折感でいっぱいでした。私にとって決していい記憶とはいえませんが、それでも記憶に残る青春の1ページであることに変わりはありません。

『ローカル線に乗って』は、この地域で過ごした人たちそれぞれの忘れかけていた記憶を引き出すトリガー（引きがね）になっているのだと思います。世代によって木次線にまつわる思い出は異なっても、そこには共通して木次線が存在していて、演劇の内容さながらに観客一人一人がこの「ローカル線」にそれぞれの記憶とともに“乗車”していく。木次線とは直接かかわりがなかった観客の方にとっても、ある種の郷愁を引き起こす普遍性をもった作品となっているように感じます。

そして、演劇の内容とともに、実は演劇部の皆さんが熱演しているその姿そのものが、世代を超え地域を超え多くの方の心を揺さぶっているのだとも思います。東京在住の卒業生の方のメールはこう結ばれていました。「帰省するたびに老いて寂れていく故郷に心が痛んでいましたが、若い後輩たちという財産があることに気が付きました。ただただ母校を懐かしむだけでなく、そんな後輩たちを出来るだけ支援していきたいと思っています。」と。



■ RとVR（リアリティとバーチャルリアリティ）

高校生の時、寮内で流れていたラジオ番組の中で、あるアーティスト（確か浜田省吾さんだったと思います）が、「手元にアルバムを買うお金があるならコンサートを観に来てほしい。」と語っていました。今から40年以上前のことですが不思議とその時の様子を鮮明に覚えています。その時は「コンサートは1回きりのものだから、好きな曲が何度も聴けるアルバムを買ったほうがいいな。」と思いました。しかし、今ならその発言に賛同できます。アルバムから流れてくる曲は、当然“リアル”なものではなく、録音されたある意味“バーチャル”なものといえます。もちろんそれは一方的に視聴するだけのもので、コール&レスポンスといった双方向のものではありません。コンサートはその時だけのものですが、だからこそ尊いのだともいえます。同じ時間、同じ空間を共有できるのはそこにいる人たちだけです。そして、共有した経験は深い感動を伴って心の奥底に刻まれます。

コロナ下では、多くの行事や会議などがリモート開催となりました。修学旅行でさえ、“バーチャル修学旅行”として、専用ゴーグルを装着して疑似体験するといった試みもありました。一定の制限下でも何とか工夫して可能な限り行事を実施してあげたいという努力を続けた3年間でした。決してその努力を否定するものではありません。リモートを利用した会議等は移動時間が短縮できたり、遠隔地との交流が容易に可能となったりするなど、特に地方に住む私たちにとってはありがたい一面もあります。ただ、やはりその時間、その空間を“リアル”に共有できる本物の体験にはかないません。

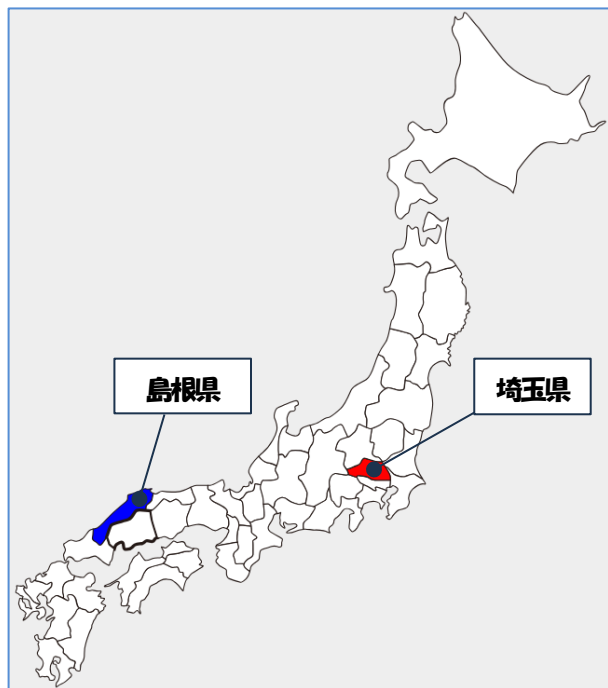
今月、本校・分校とも2年生は東京方面に研修旅行に出かけます。初めて飛行機に乗る人、初めて東京を訪れる人、初めて劇団四季の観劇やTDLでの体験をする人……。研修旅行期間中には、様々な“初めて”に接する機会が数多くあると思います。メディア等を通して今まで見たり聞いたりして知っていることでも、訪れてみて初めてわかることがあります。その空間で感じる匂いや温もりといったものはモニターの画面からでは決して体験することはできません。そして自分が描いてきたイメージと現実との差が大きければ大きいほど感動が生まれ、新たな気づきや学びを得ることができます。

今回の研修旅行のコンテンツには、埼玉県の高中生との交流会（本校は児玉高校、分校は小川高校）も用意されています。島根県教育委員会と埼玉県教育委員会は、平成30年に高等学校教育に関する連携協力協定を結んでいます。その事業の一環として、2年前には本校生徒と当時の児玉高校、児玉白楊高校（両校は今年度統合し児玉高校となりました）の生徒が、オンライン方式で開催された「島根県×埼玉県高校生交流事業」に参加し交流を深めました。このような縁もあって、今回の交流会が実現しました。おそらく本校・分校の生徒の皆さんは、これまでに埼玉県の高中生と交流する機会はほとんどなかったことと思います。島根県と埼玉県には、気候・風土・言葉・食べ物などを背景としたそれぞれの異なる文化や価値観があります。互いに顔を合わせるまでは、ワクワク感とともに不安感もあると思いますが、生徒の皆さんには、異なる地域に

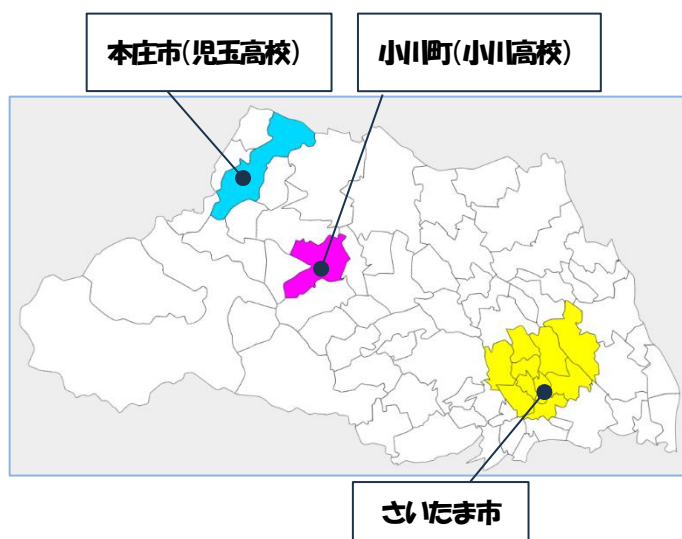
居住しながらも同時代を生きる同世代同士、それぞれの価値観を確認したり共感したりできる機会にしてほしいと思います。知らない土地で知らない人に出会うことで、自分自身の視野が広がるとともに、自分の住んでいる地域の良さを再発見できることにもつながると思います。

皆さんにとって、3泊4日の研修旅行が有意義なものになることを願っています。

【島根県と埼玉県】



- 埼玉県立児玉高等学校
<https://kodama-h.spec.ed.jp>
- 埼玉県立小川高等学校
<https://ogawa-h.spec.ed.jp>



【基本データ（人口）】

埼玉県 7,331,914 人（令和5年9月1日現在）

本庄市 77,401 人（令和5年9月1日現在）

小川町 27,924 人（令和5年10月1日現在）

島根県 649,679 人（令和5年9月1日現在）

雲南市 35,254 人（令和5年9月1日現在）

【参考（笑）】

島根県 8,649,679 人（令和5年旧暦10月1日現在, 八百万（やおよろず）の神様含む）



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【11月号】令和5年11月22日



■「古希」と「百寿」-ANNIVERSARY-

日本には、人生で大事な節目の歳に達したことを祝う「歳祝い」と呼ばれる慣習があります。「歳祝い」には、還暦（かんれき・61歳）、古希（こき・70歳）、喜寿（きじゅ・77歳）、傘寿（さんじゅ・80歳）、米寿（べいじゅ・88歳）、卒寿（そつじゅ・99歳）、百寿（ひゃくじゅ・100歳）などがあり、その後の人生の無病息災・健康長寿を祈願するものです。もちろん、毎年やってくる誕生日も「お祝い」ですよ。年齢（よわい）を重ねてくると「誕生日が来るのは（1つ歳をとったということだから）嬉しくない。」という人もいますが、日々の慌ただしさからちょっと抜け出して、今いる自分を見つめなおすよい機会だと思います。そこでは、感謝や喜びといった感情と後悔や悲しみといった感情とが入り混じった複雑なものになりがちです。それでも、人生の要所要所で一休みして日々走り続けてきた自身の道程を振り返ってみることは、今後の進むべき道を決定していく上で必要なことだと思います。

人生は、その時々を選択の連続です。「あの時こうしておけばよかったかな?」「こちらを選ばなかったらどうなっていたかな?」とその時々を選択が正しかったのかどうかについて悩むこともあります。できることならあの日に戻ってやり直したいと思う気持ちは、多かれ少なかれ誰にでもあると思います。過去に行ったその時々を選択を変えることはできません。できるのは、その時々を思い起こして「あの時はあの時でしっかり考えて選択したんだよな。」という過去の自分との“向き合い”と、今選択すべき状況に直面している現在の自分との“向き合い”です。「歳祝い」や誕生日には、これまでの自分を肯定し、これからの自分の道を切り拓いていこうとする、その心理的整理作業の側面もあるのではないのでしょうか。もちろん、社会的に誤った選択をした場合などは、その反省を今後の人生に反映させていかねばなりません。

彫刻家で詩人の高村光太郎は『道程』（発表初期のもの）の冒頭でこう詩っています。

どこかに通じてある大道（だいどう）を僕は歩いてあるのぢやない

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

道は僕のふみしだいて来た足あとだ

先日11月11日（土）に、^{かけや}掛合分校創立70周年記念式典を行いました。当日は、丸山達也島根県知事、石飛厚志雲南市長をはじめ多くの来賓の皆様をお迎えし、盛大に掛合分校の創立70周年を祝いました。人生に例えれば「古希」のお祝いとなります。

来年4月17日（水）には、^{みとや}三刀屋高校の開校100周年記念式典が予定されています。こちらは「百寿」のお祝いとなります。それぞれの学校が、歩んできた道程を顧みてその先を目指して進んでいきます。新たな学校の歴史を創造すべく、その道とともに歩いていきましょう。

【島根県立三刀屋高等学校掛合分校】

1953（昭和28）年4月1日「働きながら学ぶ定時制課程の農業科及び家庭科」定員50名で発足しました。出雲国風土記という掛合村佐長里（さながのさと）とあるこの地において、終戦の頃からの「山間地域の開拓にあたる青年を養成したい」という地元の強い要望を受け、当時の掛合町・吉田村有志の根気強い請願が結実したものでした。当時、教職員の人件費以外はすべて地元負担という厳しい条件にもかかわらず、何とかして地元青年に教育の機会を保障しようという熱い思いのあらわれでした。当初は校舎がなく、小学校の後方の新制中学の校舎として昭和24年に増築された3教室を仮校舎として、5月1日に入学生26名で開校しました。1963（昭和38）年には定時制課程の募集を停止し、全日制課程普通科に切り替わり、創立10周年を記念して学園歌も制定されました。「掛合 掛合 掛合高校」と学園歌で歌われるとおり、掛合分校は「掛合高校」愛称「掛高」として、生徒・保護者の皆様はもとより、地域の皆様から愛される高校として今もこの「さながの丘」にあります。1982（昭和57）年に島根県で開催された「くにびき国体」では、掛合町が会場となった相撲競技でベスト8進出を果たすなど、かつて相撲部は全国総体の常連校でした。また、昨年度「走れ！山月記」を演じた演劇同好会は、一人芝居ながら中国大会3位入賞を果たしました。活動の様子を追ったドキュメンタリー映画は、現在でも全国各地で高い評価を得ており、「掛高」の認知度もますます高まっています。

掛合分校は、「掛高には本物がある」というキャッチフレーズのもと「本物の少人数教育」「本物の地域密着」をその両輪として教育活動にあたっています。分校としては島根県内唯一の学校となりましたが、今では「掛高で学びたい」と入学を希望する中学生も増加傾向にあり、その存在意義の高まりをひしひしと感じているところです。



■プラトー Plateau —高原をゆく君たちへ—

昨日からの寒波到来であたり一面雪景色となりましたね。早いもので2学期も今日で終わりとなります。創立70周年記念式典をはじめ球技大会や研修旅行、校外学習など多くの学校行事があった2学期でした。

まだ暑かった8月の始業式で皆さんに「山のかたち」の話をしました。皆さん一人一人の目標を山に例え、自分に合った方法・ルートでその頂（いただき）を目指して行ってほしいという内容でした。あれから4か月経ちました。皆さんは今どのあたりにいますか？そろそろ樹木が少なくなる森林限界線を越え、お花畑にたどり着き、やがて山頂間近ですか？それともまだ登山前の計画段階？多くの皆さんは、なかなか山頂が見えない登山道を一步一步進んでいる途中ではないでしょうか。本当に山頂にたどり着けるのだろうかと思心暗鬼に陥っている皆さん、今は“高原”を歩いているのかもしれない。

高原は英語では「プラトー」と表現します。この「プラトー」という語句は「プラトー現象（高原現象）」という心理学用語でも使われています。皆さんも部活動などで経験があると思いますが、ある技術を習得しようとする際、始めは順調に上手になりますが、そのうち停滞します。習得する過程に生じるこのような停滞現象を「プラトー現象」と呼びます。このような状況では「これ以上続けても無駄なんじゃないか」「あきらめた方がいいんじゃないか」そう思っあきらめてしまう人も多くいます。しかし、ここであきらめず根気よく続けていくと、ある時一気に次のステージに駆け上がる瞬間がやってきます。いわゆる“ブレイクスルー”です。

学習にも同じことが言えます。はじめは順調に成績が伸びていきますが、そのうち成績が頭打ちになってしまいます。右肩上がりのグラフが横ばいになるその形状を高原（プラトー）に見立て「学習高原」といいます。この時期は、一説によると獲得した知識を脳内で整理整頓して次のステージへとつなげていくための準備期間ともいわれています。チョウチョでいえば、サナギの時期ともいえますね。外から見ると全く変化がないように見えますが、サナギの中ではきれいなチョウチョになるための準備が着々と進められています。

あきらめずに努力を続けていけばきっと“ブレイクスルー”がやってきます。

■プラトー現象（高原現象）



■チョウチョに例えると 🦋



最後に、それぞれの目標に向けて焦りながらも懸命に努力を続けている皆さん、物事が順調に進まなくて落ち込んでいる皆さんへ、この言葉を贈ります。

Everything will be okay in the end. If it's not okay, it's not the end.

「最後にはすべて上手くいくよ。もし上手くいっていないのなら、それは最後ではないということ。」 John Lennon (ジョン・レノン)

今年の年末年始は、コロナ前に見られたような、親戚や家族との交流の機会も多くなったり、久しぶりの再会もあったりすると思います。どうか、おうちのお手伝いや団らんの時間も大切にしながらよい冬休みを過ごしてください。Have a nice winter holiday!



■今できること

令和6年が始まりました。「一年の計は元旦にあり。」という言葉があります。“元旦”とは元日の朝という意味です。「一年の計画・目標は元日の朝にしっかり立てておくことが大切である。」という意味です。皆さんの中には、元旦に今年一年の計画・目標を立てた人もいます。

しかし、その日の夕方に大地震と大津波が石川県能登地方を襲いました。この地震の影響により、多くの亡くなられた方々とそのご家族の皆様、さらに被災地に向けて支援物資を一刻も早く届けようとの思いの中、輸送機事故で亡くなられた方々とそのご家族に対し、謹んでお悔やみ申し上げます。また、この地震の影響により被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

全容は今もつかめていませんが、被災状況が少しずつ判明するとともにその被害の甚大さに心が痛みます。私の家にも、元日に石川県能登地方に居住されている方から年賀状が届いていました。その方とは今夏に旅行で島根を訪問された時会うことができ、やっと5月に発生した地震から復興しつつあるという話をされていました。今回の地震発生後に連絡を試みましたが、未だに連絡がつかません。現地は通信状況がよくないようなので一層心配が募ります。小学校の教員をされているその方は、きっと子どもたちのケアに奔走しているのだと信じています。

被災地域の状況をニュース等で見聞きするたびに、テレビの前に正座してしまう自分がいます。被災地域の方々のつらさに共感し「自分に何かできることはないだろうか？」との思いを抱いている皆さんも多いと思います。一方で「被災者の方々が苦しんでいるのに自分はこんなことをしているいいのだろうか？」といった思いを抱く人もいるかもしれません。共感する力が強くなればなるほど“日常を過ごしている”自分を責める気持ちが募ってきます。必要以上に自責の念を抱く「共感疲労」とか、被災地域のニュース映像にショックを受けて気持ちが不安定になってしまう「惨事ストレス」といった表現を目にすることも増えてきました。あるできごとを自分事として考え、他者への共感力が強いことは決して悪いことではありません。むしろ、感受性豊かで思いやりのある人といえるでしょう。今、心に重い何かを感じている人は、話のできる誰かに言葉をかけてみてください。思っていることを言葉にして発してみると、思った以上に安心できるものです。

そして、他者の思いに寄り添いながらも、今自分にできることは何かを考えてみてはいかがですか？家族の一員としての自分、学校の一員としての自分、というように今の自分がいる位置を確認して、自分の目標に真摯に向き合うことも大切なことです。冒頭で「一年の計は元旦にあり。」という言葉を紹介しましたが、新しい学年・年度は4月から始まります。皆さんが年度当初に立てた計画・目標は何だったのでしょうか？3学期は次の年度への「0学期」、つまり準備段階ともいえます。1・2年生の皆さんは、今年度の総括をしながら新学年に向けた準備を、3年生は卒業後の自分の進路を見据えた高校生活の総決算をする大切な時期です。今ここにいる自分を大切に、自分にできることは何かを考えてみましょう。

この最終学期が、皆さんにとって有意義な日々となるよう期待しています。



■演劇のチカラ②—自己との出会い—

昨年末に、掛合分校卒業生の曾田昇吾さんが母校を訪れてくれました。

令和5年3月に掛合分校を卒業した曾田さんは、在学中に演劇と出会い演劇同好会の一員として活動を続けてきました。2年次には、当時演劇を指導していた亀尾佳宏教諭の誘いもあり同級生3人と演劇同好会として活動し、県大会地区予選で『走れ！走れ走れメロス』を上演。県大会出場と



はならなかったものの、演劇を志す契機となりました。同好会員が曾田さんだけになった3年次の県大会では『走れ！山月記』で一人芝居を演じ最優秀賞を獲得、中国大会でも第3位入賞を果たしました。そして、卒業後は“演劇界の東大”と呼ばれる文学座附属演劇研究所本科生の門をたたき、本格的に演劇に取り組んでいます。文学座での曾田さんの同期生は30名ほどだそうです。「稽古は大変ですか？」という私の問いかけに対し「大変な時もありますが、演劇が好きなので楽しい毎日です。年が明けると卒業公演があるので、それに向けて稽古を頑張っています。」と力強く答えてくれました。

曾田さんは、昨年山陰中央新報社の取材に対し「(小・中学校ではイライラばかりしていたが)高校で熱中できるものを見つけた。どこまでいけるか分からないけど本気でやる」とコメントしています。曾田さんにとって演劇との出会いは偶然だったのかそれとも必然だったのか…。しかし、演劇を通しての未知なる“自己との出会い”は必然的なものであったと思います。

令和4年、曾田さんたち演劇同好会の活動の軌跡を描いたドキュメンタリー映画『走れ！走れ走れメロス』(折口慎一郎監督)が製作されました。その作品は、サブカルの聖地下北沢、通称シモキタで開催された第14回下北沢映画祭で審査員特別賞や観客賞など4部門を受賞したほか、東京ドキュメンタリー映画祭2022入選など各地の映画祭で高い評価を獲得しました。上映はその後全国各地で行われ、じわじわと共感の輪が広がってきています。さらに、続編新作にあたる『走れメロスたち』が製作され、高校卒業を目前に控えて孤独や葛藤、焦燥を抱える彼らそれぞれの「選択」が描かれています。

映画の感想には「これは傑作。今年のドキュメンタリー作品でNo.1かもしれない。」といった、作品そのものに対する評価とともに「夢中になれるものがある、それだけで素敵だ！ラストには泣かされました。」といった、作品に対する感情移入を感じさせるものもありました。中には、作品中の主人公に自分を投影させた方もいらっしゃったかもしれません。鑑賞する方々に「ああ若い頃はこんな感じだったなあ」と若い頃を回想させるチカラ、「自分もこんな日々を過ごしてみたかったなあ」とある種憧憬の念を抱かせるチカラ、演劇にはそんなチカラがあると思います。

演劇により未知なる“自己との出会い”を果たし、新たな自分を発見した曾田さんだけでなく、演劇・映画を観た方々もまた、それぞれの人生を振り返り、本当の“自己との出会い”を果たしているのかもしれない。



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【3月号】令和6年3月1日



■卒業式式辞

暖冬を忘れるかのような、ここ数日の寒の戻りの中、校舎周辺の梅が凜と咲き誇っています。

本日は、後援会会長景山俊太郎様をはじめ、多数の来賓の方々のご臨席を賜り、卒業式を挙行することができました。誠にありがとうございます。

昨年5月8日の新型コロナウイルス感染症の5類移行とともに、教育活動の多くが徐々にコロナ禍前に戻ってきました。今年度“4年ぶり”という言葉は何度耳にしたでしょうか。この卒業式も“4年ぶり”に多くの来賓の方々をお迎えし、1・2年生と同じ空間で卒業生の晴れ舞台をお祝いするコロナ禍前の形態に戻して挙行することができました。当たり前と思っていたことが当たり前ではなかった3年間でした。思い起こせば、令和2年度・3年度は、1・2年生は教室でリモート参加、昨年度は2年生のみ式に参加し、1年生は教室でリモート参加でした。式後のホームルームは思い出の詰まった3年教室ではなく、ソーシャルディスタンスをとりやすい講堂で実施した年もありました。今ここにいる卒業生の皆さんが入学式の時には、2・3年生の参加が無く、皆さんと保護者のみの参加でした。そのことを思うと、今こうして全生徒・保護者の皆様・そして多くの来賓の皆様とともに、卒業生の皆さんの門出を祝えることは万感の思いです。

来賓の皆様方には、卒業生を様々な面で支えていただきました。重ねて感謝申し上げます。生徒達は、本日高校を巣立っていきますが、これからの人生において向き合うべき幾多の局面があると思います。20年後、30年後の地元雲南市・島根県を支えていく若者達に、地元を愛する先輩として、今まで同様のご支援をお願いいたします。

保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。小学校・中学校の卒業式とはまた違う思いをされている方が多いのではないのでしょうか。4月からは社会人の仲間入りをするお子様、親元を離れて県外に旅立っていくお子様もいらっしゃると思います。3月発行の『PTAカケゴ—第49号』には、保護者の皆様から、これまでのお子様との思い出や、これまで伝えることができなかった思いなどが数多く寄せられています。保護者の皆様には、お子様が巣立っていかれる前に、人生の先輩としてご自身のこれまでの経験の一端を、ぜひ自らの声でお子様に語りかける機会を持っていただけないでしょうか。学生時代のこと、就職・仕事のこと、転機となった出来事など何でも結構です。生徒たちは、今後自身が向き合うべき多くの局面で必ずその言葉を思い出さずです。保護者としてだけでなく、メンター（助言・指導者）としてお子様を支えていてもらいたいと思います。

さて、卒業生の皆さん卒業おめでとう。皆さんは私にとって特別な卒業生です。校長として初めて卒業証書を渡すという記念すべき存在です。皆さんとは1年間という短いかわりでしたが、掛高の行事に参加するのが毎回楽しみになるほど、多くの活力をもらいました。今年度は、掛高創立70周年の記念すべき年でした。記念式典後のアトラクションでの「3年生地域創造研究発

表」は実に堂々としたもので“掛高の歴史七十年”を詳細にプレゼン発表してくれました。発表中にあった「時代が掛高に追い付いてきた」というキーフレーズは、まさに掛高がこれまで実践してきた「本物の少人数教育」「本物の地域密着」が、時代を先取りした取組であったことを端的に示した言葉でした。私たち教職員にとっても勇気をもらえた言葉となりました。ありがとう。

今年度「向き合う。その先に…」を合言葉に設定し、4月の始業式では、自分自身に向き合い、そして自分自身と対話してほしい。大河ドラマの主人公のように「どうする自分」と問いかけながら悩みや課題に向き合ってみてはどうですか？難題を前にして“よわい”自分に向き合いながらも課題解決にあたっていく姿には、逆に“つよさ”を感じます。という話をしました。

「人生は最善観」という言葉があります。最善観の最は最高・最良の最、善は善悪の善、観は主観・客観の観です。哲学者で教育学者の森信三氏が唱えたこの言葉は「人生で起こりうる出来事は必然かつ最善である」という意味です。一見無意味に思えること、つらいこと、悪いことと思えることも、自分に与えられた最善の出来事として向き合い、乗り越えた先には必ず自分にとって有用となるという考え方です。卒業生の皆さん、これからの人生には様々なつらい局面もあるかもしれません。そんな時には、この「最善観」という言葉と保護者から聞いたリアルな経験談を思い出して、直面する課題や自分自身に向き合いながら乗り越えていってください。コロナ禍を乗り越えてきた皆さんならきっとできるはずです。

大丈夫ですよ。

「向き合う。その先に…」一回り成長した自分自身の姿を思い描いて。

以上、式辞とします。

令和6年3月1日

島根県立三刀屋高等学校掛合分校
校長 本間 達也



島根県立三刀屋高等学校 掛合分校

校長発 『ほんりゅう』

【3月号②】令和6年3月3日



■「マルチバース」の可能性

NHK松江放送局が開局90周年を記念して制作したオリジナルドラマ『島根マルチバース伝』が3月1日に放送されました。このドラマでは、主人公 ひかり が「あのとき島根を出ていれば、どんな人生があったのだろうか……？」との思いを抱きながら“地元で輝こうともがく”主人公の悲喜こもごもを通して、島根で暮らす皆さんにエールを送る物語（NHK松江放送局ホームページより引用）です。マルチバース (multiverse) は、私たちのいる宇宙以外に別の宇宙が存在しているという考え方で、一つの宇宙であるユニバース (universe) に対し、異なる複数の宇宙を意味するものです。

主人公 ひかり が“異なる選択をした自分の人生”に生きる様々な自分に出会いながら、現在の自分を見つめなおしていくというこのドラマには、主人公 ひかり が高校時代を過ごした“三刀屋”高校として本校が登場し、本校演劇部の皆さんも出演しています。私も、このドラマのロケを複数回見学させていただく機会をいただきました。そこでは、テレビ画面には当然映らない裏方さんたちの仕事ぶりを目の当たりにすることができました。一つのシーンの撮影する際に、太陽光が差しすぎていないか、緊急車両のサイレンといった雑音が入っていないかなど周囲の環境に気を配りながら「OK」が出るまで何度も何度も撮り直しをされていました。これまでも、いわゆる“メイキング映像”でそれらしいシーンは何回も見ているのですが、実際のロケ現場を生で見ると、現場の緊張感とともに、演者さんの気持ちの入れ方や音声さんやADさんの細やかな準備の様子など、スタッフがそれぞれの役割をこなしながら一つの作品を完成させていくまでの大変さが改めてわかりました。と同時に、よい作品づくりのために自分の仕事に対して決して妥協しないプロフェッショナルな姿勢も感じることができました。

昨年、東京にいる高校時代の同級生と話をする機会が何回かありました。高校を卒業してから現在に至るまでの苦労話を交えながら、母校やふるさとについて今現在思うところなどについて語り合いました。「違う職業に就いて東京に住んでいたら今頃どうなっていたかなあ。」という私に「うーん、東京は便利だけど落ち着くのは島根かなあ。」と返す友人。そんな会話をする中で、友人の一人は「高校の時の担任が、自分と仲の良かったA君に〇〇大学への進学を勧めていた理由が最近何となくわかった気がする。」と言いました。大学を卒業後、東京の企業へ就職し海外勤務も豊富な彼は「A君の持っているポテンシャルを将来的に活かしていけるのは〇〇大学での修学だと考え、進学を勧めていたのだと思う。」と故人となった担任へのリスペクトを込めてそうつぶやきました。私自身も教員生活が長くなり、これまで多くの生徒の皆さんとご縁をいただきました。本校保護者の皆様の中にも、高校時代に担任をさせていただいた方々がいらっしゃいます。果たしてその時に、そこまで自信をもって様々なアドバイスができていたのかどうか…。様々な職業に携わっている方々の妥協しない仕事ぶりを思い返し、今現在を過ごす日々です。これからそれぞれの「バース」に進んでいこうとする高校生の皆さんを、少しでも先に生まれ人生という道のりを少しでも先に歩いている者としてしっかり後押ししていきたいと思っています。

どこで暮らすにしても、どんな職業に就くにしても、大切なのは“自分”というベースがしっかりしているかどうかです。まずは、

高校生の皆さん、どの「バス」を選択し歩いて行くかは皆さん次第です。皆さんの目の前に広がっている可能性は無限大です。10年後、20年後の自分が現在の自分を見ている姿をイメージしながら、多くのことを吸収し自身の選択の幅を広げていきましょう。高校時代は、マルチな「バス」の入口を数多く見ることができかけがえのない時ですから。

【『島根マルチバス伝』あらすじ（NHK 松江放送局ホームページより）】

ひかり（28）[桜庭ななみ]は、高校演劇で神童と呼ばれ、かつて女優になることを夢見ていたが、今では地元のスーパーましまやでアルバイトをしながら、「自分が輝けないのは島根にいるせいだ！」と家族や友人に愚痴を吐きながら過ごしていた。

そんなある日、占い店のような怪しい男【佐野史郎】の店に入ると、「あなたが輝くはずだった人生を見えますか？」と不気味な提案が。なんとそこで別のバス（異なる選択をした自分の人生）に生きる自分を目撃するが、そのどれもが理想とは程遠い姿ばかり。そんな時、妹から地元の市民劇に誘われて…。

※『島根マルチバス伝』の放送予定は、次のとおりです。

- 地上波 令和6年3月1日（金）20:00～20:59【島根県内のみ・放送済】
*NHKプラスで3月8日（金）20:59まで視聴可能
- BS 令和6年3月22日（金）17:00～17:59



■あの日あの時—忘れてはいけないこと—

2011（平成23）年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする最大震度7（M9.0）の東北地方太平洋沖地震が発生し、その後に発生した大津波により太平洋沿岸は壊滅的な被害を受けました。あの日あの時から13年が経ちました。

昨年8月、その地にある旧石巻市立大川小学校（宮城県）を訪れました。石巻市でも、多くの地域で震度6（弱～強）の激しい揺れが約3分間続き、その後に大津波が襲いました。大川小学校は、高さ約10メートルの大津波により全校児童108名の7割にあたる74名と教職員10名の84名が死亡、行方不明となりました。私が訪れた日は、その日のことが想像できないほど晴れ渡った空のもと自然豊かな景色が広がっていました。震災遺構として、現在もあの時のまま保存されている校舎等を目の当たりにし、多くの尊い命が失われたことに対して心が痛むとともに、改めて津波の恐ろしさを痛感しました。子どもたちが毎日元気に過ごしていたはずの教室棟の前には次のような碑が建立されていました。

2011年3月11日

いつもと同じ朝でした

「行ってきます」の後ろ姿を見送ったあの日

「寒かったですよ」とあたたかい手で抱きしめてあげたい

March 11, 2011-

It was a morning like any other.

On that day, we saw them off after telling each other "Have a nice day."

How we wish we could hold them in warm arms and say "It was cold, wasn't it?"

涙が止まりませんでした。保護者の皆様のお気持ちを思うと、いたたまれなくなりました。学校管理者として、自然災害に対する日頃の備えと危機管理意識を高めておく必要性を強く心に刻みました。

震災から13年を前に、被災者の関係者の方がメディアのインタビューに対し「月日が経つとともに後悔ばかりが募ってくる」と答えていらっしゃいました。ご遺族の方々にお気持ちを思うと軽々に言葉を発することはできません。13年前のあの日あの時を前に、お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、今を生きる私たちにできることは何かを今一度考えています。

【大川小学校沿革】

1873（明治6）年	桃生郡釜谷小学校として開校
1985（昭和60）年	大川第一小学校と大川第二小学校が統合 大川小学校として現在の校舎が完成
2011（平成23）年3月11日	東日本大震災の津波で被災
2018（平成30）年3月31日	閉校

■旧大川小学校に設置されている碑

学校が残りました

思い出が残りました

そして これからも

われらいま きょうの日の 歴史を刻む

われらこそ あたらしい 未来をひらく

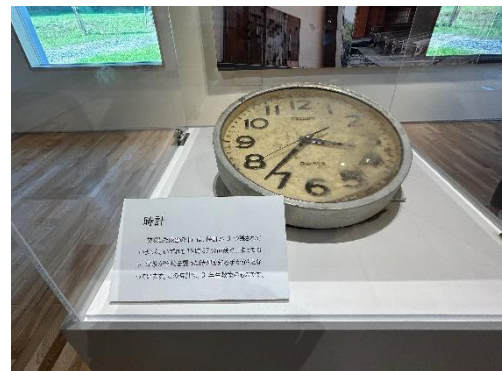
The school remained here.

Memories remained,too.

And more to come……

We will now carve the day called today in history.

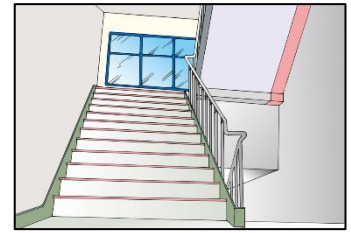
We are the who will open up a new future.





■踊り場 (landing) —3 学期終業式にて—

今日で3学期、令和5年度が終わります。皆さんにとって、令和5年度はどんな1年間だったでしょうか？1年生の皆さんは初めての高校生活を迎えた年、2年生の皆さんは高校生活2年目が終了となります。昨年4月、新鮮な気持ちで思い描いた目標への取組は、



どの程度達成できましたか？1学期の始業式では皆さんに「新年度のこの機会に自分自身に少し『向き合って』みませんか。『その先に』は、きっと新しい世界、可能性が開けていると思います。」と伝えました。部活動や学校行事、友達との会話等の楽しい時だけではなく、できれば避けて通りたいことや場面、そして何より自分自身に『向き合って』過ごすことができましたか？年度末を迎え、改めて思い返してみてください。

先日、階段を上りながらこんなことを考えました。階段の途中にある、この踊り場がなかったらもっと早く上れるんじゃないかな？と。踊り場とは、階段の途中に設けられたやや広くて平らな足休め場所のことです。建築基準法施行令では、例えば高校に設置されている階段については高さ3mをこえるものについては3m以内ごとに踏幅1.4m以上の踊り場を設置するよう細かく定められています。そもそもなぜ階段に踊り場があるのかというと、方向転換、階下への転落防止、昇降時の小休止などのためといわれています。

なぜ階段に踊り場があるのかと考えるよりも、階段に踊り場がなかったらどうなるのか？と考えるとイメージしやすいかもしれませんね。休みなく上り続けていると一休みできませんし、目標地点への到達度もわかりません。あるいは、振り返って下を見ると怖くなってしまうこともあるでしょう。一方、踊り場があると、そこで一旦足を止めこれまで自分が一段一段上ってきた過程を振り返りながら態勢を整え、目標地点へ向けた新たな一步を踏み出すことができます。皆さんはそれぞれ1年をかけて上の階へと続く階段を一段一段上ってきました。この春休みを“階段の踊り場”にとらえ、あの時のこと、その時のことを自分なりに振り返り、一つ上のステージを目指すための修正期間と考えてください。

「踊り場」は英語では「landing」（着陸）と表現します。皆さんそれぞれが設定した目標地点に landing = 着陸できるよう、自分自身に『向き合い』ながら充実した春休みを過ごしてください。新年度の始業式で、やる気に満ち溢れた皆さんの眼差しに出会えることを楽しみにしています。

* 「踊り場」の由来

1883年に建設された「鹿鳴館」で行われた舞踏会の際に、ドレスを着た女性たちが階段を下りながら、平らな場所で止まってポーズをした時、ドレスのふくらんだ部分が揺れる姿が踊っているように見えたからという説もあります。（毎日小学生新聞 HP より引用）